

ジェームズ・クーリー・フレッチャーは、妻ヘンリエットと息子エドモンドとともに、1852年2月14日にリオデジャネイロに到着した。その後、フレッチャーは、当時の駐ブラジル特命全権公使であったロバート・カミング・シェンク (Robert Cumming Schenck) の庇護の下、アメリカ人のための牧会活動に従事した。その間、彼は公使から「アタッシュ (attaché)」、すなわち専門調査員としての命も受けた。そして、フレッチャーの活動は次第に宗教活動の範疇を超え、外交関係の仕事にも携わるようになり、後には公使館書記官や代理公使を務めるなど、重要なポストに就くまでになった。

この点で、先にみたダニエル・パリッシュ・キダーとフレッチャーの活動は、かなり対照的であるようにみえるが、ともにブラジルのプロテスタント化を目指していた点は共通しており、その対象とした層が異なっていたにすぎない。前者が主としてカトリック教会の影響下にあった市井の人々を対象としたのに対し、フレッチャーは、ブラジル帝国の知識人や政治家といったエリート層を主な対象としていた。

フレッチャーの活動展開と米伯関係への関与

ブラジル宗教史を専門とするブルーノ・ゴンサウヴェス・ホージによると、当初フレッチャーは、牧会活動のみに従事するという前提のもとでブラジルへ渡った。しかし、シェンクとの出会いを契機として、自身を取り巻く状況が変化するなかで次第に考えを改め、牧会活動に限定せず、ブラジル人への福音宣教も重要な任務であると自覚するようになった⁽¹⁾。事実、フレッチャーの心情の変化は、父カルヴィンに送った手紙にも明確に示されており、そこには、ブラジルのプロテスタント化に向けた彼の画策や、その難題に向き合おうとする強い意志が記されている⁽²⁾。彼は、ブラジルのプロテスタント化は単なる改宗にとどまるものではなく、それが国の経済的、科学的、技術的な「進歩」にもつながると思っていた。そのため、同じく「文明化」を訴えたキダーとは、共通の認識を有していたのである。

1852年から1853年にかけて、フレッチャーは、プロテスタントに寛容でリベラルな傾向をもつ知識人や政治家との交流を積極的に行い、次第に彼らの信望を集めていった。彼は、こうした人々を「進歩の友人であるブラジル人」と称し、可能な限りカトリック教会の方針に抵触しないように自身の考えを訴えるとともに、さまざまな利害を調整できる政策についても模索した。こうした活動を続けるなかで、1852年9月、皇帝ドン・ペドロ2世がカリフォルニアへ向かう途中でリオデジャネイロ港に寄港していたアメリカの蒸気船シティ・オブ・ピッツバーグ号を見物することになり、フレッチャーがその案内役を務めた。これが、彼と皇帝との最初の出会であったといわれている。

皇帝は蒸気船を見て回り、その機能を詳細に分析し、精巧なメカニズムに驚嘆したといわれている。フレッチャーは皇帝に付き添い、英語、フランス語、ポルトガル語を駆使して、皇帝とアメリカ人士官との間の仲立ちを行った。事実、この出来事

は *Brazil and the Brazilians* (1857) に記されており、フレッチャーは次のように記録している⁽³⁾。

ブラジル滞在中、私は、たびたび気づかされることがあった。アメリカについてブラジルで広まっていた認識不足、そしてブラジルについてアメリカ国民の間に広まっていた、それと同様の認識不足である。そこで私は、一個人の力の及ぶ限り、誤った印象を取り除き、両国の間により良い相互理解をもたらしたいと願った。

皇帝との出会いを機に、フレッチャーは、両国にはびこる互いの「認識不足」に気づき、「相互理解」という言葉を用いて両国の関係をより緊密にする必要性を抱くようになった。1853年から1854年にかけて、彼は妻の健康問題のためにアメリカへ一時帰国するが、その間、すでに帰国していたシェンクの協力を得て、ミラード・フィルモア大統領と会い、ブラジルとの良好な関係を構築する必要性を説いた。しかし、やがて彼は、ブラジルがすでにアメリカによる地政学的戦略の渦中にあることを、不運にも思い知らされることになった。

モーリーによる「ブラジル・アマゾン開発構想」とその影響

この時期、首都ワシントンでは、アメリカ海軍士官であり、海洋学者、天文学者、地質学者、歴史家など、多彩な経歴を持つマシュー・フォンテーン・モーリー (Matthew Fontaine Maury) による「ブラジル・アマゾン開発構想」が進められていた⁽⁴⁾。彼は、1850年代を通じて「アマゾン川流域の国際開放」と、それに伴うアメリカ南部の黒人奴隷を用いた当地の植民計画を強く提唱・画策していた。こうした動きの背景には、当時のアメリカで奴隷制の廃止をめぐる北部諸州と南部諸州が対立していたことがある。そこでモーリーは、両者の対立を緩和するため、アマゾン地域を南部の「安全弁 (safety valve)」とみなし、奴隷主と黒人奴隷を当地に移して大規模プランテーションを築く構想を練っていた。

ちなみに、アメリカ南部を起点として奴隷制を国外へ拡大しようとする発想は、アンテベラム期の地政学的戦略においてもたびたび取り上げられていた。とりわけ、南部から地理的に近いキューバの占領・併合は、アマゾン地域への進出以上に活発に構想されていた。このモーリーの構想はフレッチャーに大きな衝撃を与えるとともに、ブラジルとアメリカの良好な関係構築を阻む障壁として立ち現れたのである。

〔註〕

- (1) Bruno Gonçalves Rosi. "James Cooley Fletcher, o missionário amigo do Brasil". In: *Almanack*. Guarulhos, n.05, 1º semestre de 2013, p. 65.
- (2) Ibid., p. 65.
- (3) Daniel Parish Kidder and James Cooley Fletcher. *Brazil and the Brazilians: Portrayed in Historical and Descriptive Sketches*. Philadelphia: Childs & Peterson, 1857, pp. 237-238.
- (4) Rosi, op.cit., p. 66.